コノフィツムの育て方

Conophytum

ハマミズナ科 / Aizoaceae

> 1対の葉が融合した1〜3cmほどの小さな「ボディ」が、球形・二裂形・有窓型など多彩な姿を見せる「生ける宝石」。夏は紙のような殻に包まれて眠り、秋の劇的な脱皮を経て新しい姿へ生まれ変わる、冬型の矮性多肉植物です。

基本データ

成長期	冬型（秋〜春生育、夏休眠）
耐寒温度	冬季は3℃前後を目安に室内・簡易温室で管理（乾燥時はより低温にも耐えるとされる）
日照	日なた〜明るい遮光（5月上旬〜10月上旬は50%程度の遮光）
播種適期	秋（9月下旬〜10月中旬ごろ）
発芽日数	1〜2週間（そろうまで1〜2か月かかることも）
主原産地	南アフリカ北ケープ州・西ケープ州、南西ナミビアのサクセントカルー地域（冬雨気候の乾燥地）
難易度	

概要・魅力

コノフィツム属（Conophytum）は、ハマミズナ科（Aizoaceae）ルスキエア連ルスキオイデアエ亜科に属する、南アフリカ原産の矮性多肉植物です。分布は北ケープ州・西ケープ州から南西ナミビアにかけての「サクセントカルー」と呼ばれる冬雨気候の乾燥地帯にほぼ完全に限られ、南北約800km・幅200km未満という細長い帯状の範囲に集中しています。属名はギリシア語で「円錐（cono-）」と「植物（phytum）」を組み合わせたもので、1922年にイギリスの植物学者ニコラス・エドワード・ブラウンによって発表されました。

最大の特徴は、1対の葉がほぼ完全に融合して球形・卵形・円錐形・二裂形（うさぎの耳のような形）などさまざまな姿の「ボディ」をつくる点です。多くは高さ・直径ともわずか1〜3cmほどという極小サイズで、その姿と質感の多様さから「生ける宝石」「生ける石」とも呼ばれます。夏は完全に休眠し、古い葉が紙のような殻となってボディを覆いますが、秋になるとこの殻を破って中から新しいボディが姿を現し、晩夏〜秋にかけて花を咲かせます。この劇的な「脱皮」の瞬間こそ、コノフィツム栽培のいちばんの醍醐味といえるでしょう。

分類学上認められている種は100種以上（亜種・変種を含めるとさらに多くなります）にのぼり、頂部に半透明の「窓」を持つ有窓種、表皮に赤い稜が走る種、群生してマット状に広がる種など、姿かたちのバリエーションは非常に豊かです。花は昼に開く種と夜に開く種があり、香りや花色も種によって異なります。SEEDSTOCKでは、こうした多彩なコノフィツムを種子からじっくり育てる楽しみをお届けしています。

- **極小サイズとコレクション性** — 1〜3cmほどの小さなボディに、形・色・模様の個性が凝縮されています。
- **劇的な脱皮** — 夏の間に古い葉の殻をまとい、秋に新しいボディが姿を現す様子は、他の多肉植物にはない見どころです。
- **昼咲き・夜咲きの多様な花** — 種によって開花の時間帯や花色、香りが異なり、開花期はコレクションの楽しみがさらに広がります。
- **豊富な種類** — 100種以上が知られ、形状・質感の異なる品種を集める楽しみがあります。

> コノフィツムは近縁のリトープスと混同されがちですが、栽培上は決定的な違いがあります。リトープスの多くは実質的に夏型として扱われるのに対し、コノフィツムは秋に成長を始め冬〜春にかけて育ち、夏は完全休眠する冬型です。水やりのスケジュールを取り違えると株を傷めてしまうため、まずはこの生育サイクルをしっかり押さえておきましょう（詳しくは「置き場所」「水やり」をご覧ください）。

置き場所

コノフィツムは一年を通じて、雨や強い西日を避けつつ、しっかり光に当てられる風通しのよい場所での管理が基本です。年間を通して最低でも4時間程度の日照を確保しないと、株が徒長したり、翌年の生育が鈍ったりする原因になります。「夏はまったくの日陰でよい」という考え方はよくある誤解で、実際には強すぎる直射を避けつつも、明るい木漏れ日程度の光は保つ「明るい遮光」が適切です。

生育期（秋〜春、目安9月下旬〜翌5月ごろ）

戸外の日当たりのよい場所、または日照時間の長い窓辺で管理します。秋に旧皮を破って現れた新しいボディは、冬〜春にかけてゆっくりと育ちます。この時期にしっかり光を確保することが、ボディの色つやや翌年の花つきにも影響します。

休眠期（夏、目安6〜9月ごろ）

5月上旬〜10月上旬ごろにかけて、50%程度の遮光ネットを使うか、明るい半日陰へ移動させます。真夏の強い直射日光、とくに季節の変わり目に急に強い光へさらされると「日焼け」を起こしやすいため、遮光の準備は早めに整えておきましょう。日本の梅雨〜盛夏は高温多湿になるため、雨が直接当たらない軒下や棚下に置き、サーキュレーターなどで空気を動かして蒸れを防ぐことが、夏越しを左右する最大のポイントです。

冬の防寒

最低気温が3℃を下回るようなら、室内や簡易温室に取り込みましょう。用土が乾いていれば氷点下でも一時的に耐えるという報告もありますが、日本の冬は空気が乾燥していても土中の湿度は残りやすいため、安全側に立って早めに防寒するのが確実です。とくに実生1年目の幼苗は寒さへの耐性が低いので、成株よりも早めに屋内へ移してください。

> 灌水を株の真上からかけると、表皮の色や粉（ブルーム）が流れてしまうことがあります。鉢の縁からそっと注ぐか、腰水で管理すると、コノフィツムならではの繊細な色合いを保ちやすくなります。

水やり

コノフィツムの水やりは、他の冬型メセン類と同じく「用土が乾いたらたっぷり」が基本ですが、**夏の水やりをどう扱うかが最大の分かれ目**になります。「夏は完全断水」という単純化された言い方が広まっていますが、実際には種によって夏の耐乾性に幅があり、一律の断水がかえって株を傷めることもあるため注意が必要です。

生育期（秋〜冬〜春）

用土の表面が乾いたのを確認してから、鉢底から流れ出るまでたっぷり与えます。春になり葉の表面が紅葉するように色づいて乾き始めたら、休眠が近づいているサインです。このタイミングで徐々に水やりの間隔をあけていきましょう。

脱皮期（旧皮を破って新しいボディが出てくる時期）

新しい葉が旧皮を破って顔を出す前後は、灌水を控えて施肥も止めます。しっかり日照を確保することで旧皮の乾燥・消耗が進み、新しいボディがきれいに現れやすくなります。

休眠期（夏）

基本は断水気味の管理ですが、**耐乾性は種によってかなり差があります**。丈夫な普及種は3〜4週間に1回程度の断水寄りの管理で問題ありませんが、乾燥に弱い小型種や有窓種は、真夏でも2週間に1回程度、あるいは涼しい時間帯の軽いミスト散水を必要とすることがあります。お手元の株の様子（極端なしわ、極端な縮み）を見ながら、必要に応じて少量の水分を補ってください。

> 水やりに迷ったときは「もう少し待つ」を選ぶのが安全です。ただし、乾燥に弱い種を一律に完全断水すると枯死につながることもあるため、「コノフィツムは全種一律に断水すればよい」と思い込まないことが、夏越し成功の分かれ目になります。

用土・植替え

用土の配合例

コノフィツムには**水はけのよい用土**が向いています。代表的な配合例としては、鹿沼土（小粒）2：赤玉土（小粒）2：ピートモス2：川砂2：くん炭2、といった組み合わせが日本の栽培者の間でよく使われます。無肥料の用土を基本とし、有機質を入れすぎないことが過湿対策のポイントです。

鉢

多湿を嫌うため、株の大きさに対してやや小さめの鉢を選びます。購入直後の数頭程度の株なら2.5号鉢ほどが目安で、群生が進んで頭数が増えてきたら3号鉢以上に切り替えるとよいでしょう。鉢内の通気を保つため、受け皿に水をためたままにしないことも大切です。

植替えの時期と頻度

植替えは年1回程度が目安で、大株に育った株は2年に1回程度でも構いません。適期は生育がひと段落する**10〜11月ごろ**です。古い用土を根から丁寧に落とし、群生が進みすぎた株は数頭ずつに分けて植え直すと、その後の生育・脱皮がスムーズになります。植替え直後は数日ほど水やりを控え、根が落ち着いてから通常の水やりに戻しましょう。

> **発芽のさせ方**
>
> コノフィツムは種子からの実生（みしょう）でも育てやすく、小さな苗が少しずつボディを大きくしていく過程を楽しめます。ただし成長はゆっくりで気長な作業になるため、種

子の鮮度が発芽率を大きく左右します。SEEDSTOCKでは鮮度管理した種子をお届けしていますので、届いたらできるだけ早めに播種することをおすすめします。次の手順を目安に進めてみてください。

1. **播種の適期を選ぶ**：残暑が続く8月下旬〜9月上旬は避け、涼しくなり始める**9月末〜10月中旬ごろ**を目安にまきます。真夏の高温多湿な時期の播種は、カビや蒸れによる失敗リスクが高くなります。
2. **用土を用意して消毒する**：下層2/3にはピートモス・赤玉土・サボテン用土を1：1：2程度で配合した用土、上層1/3には種まき・挿し芽用の細粒用土を3mm程度のふるいでふるったものを重ねます。土は必ず新品を使い、播種前に熱湯消毒や殺菌剤の散布でカビ・雑菌を予防しましょう。
3. **種子をまく**：用土の表面に種子が重ならないようバラまきます。コノフィツムの種子は非常に細かいため、爪楊枝などを使って1粒ずつ丁寧に置くと管理しやすくなります。
4. **覆土はしない**：土をかぶせず、種子を表面に置いたままにします。ラップや蓋も基本的には不要です。
5. **腰水で湿度を保つ**：播種後2か月程度は腰水（底面吸水）で用土を常に湿った状態に保ちます。上からの水やりは細かい種子を流してしまうため避けましょう。
6. **温度を管理する**：発芽適温の目安は**15〜20℃前後**です。日中と夜間で気温差をつけられる環境（日中15〜20℃・夜間5〜10℃程度）だと、自生地に近い変温条件になり発芽の後押しになります。
7. **発芽を待つ**：条件が合えば播種後**1〜2週間ほど**で発芽が始まります。ただし種子の鮮度によっては発芽がそろうまで1〜2か月ほどかかることもあるので、気長に見守ってください。
8. **腰水の水位を徐々に下げる**：発芽後も腰水を継続し、3か月目あたりから少しずつ水位を落とし、4か月目以降は10日に1回程度の腰水へ移行します。
9. **発芽後は明るい半日陰で管理する**：50%程度の遮光下で、直射日光を避けた明るい場所に置きます。実生苗は成株よりも乾燥・強光に弱いため、慎重な管理を続けましょう。生育はゆっくりで、最初の1年ほどは遮光・低温管理を続けるのが基本です。

> コノフィツムは成長がゆっくりな植物で、開花までには1年以上かかるのが普通です。焦らず気長に見守り、最初の夏越し（休眠期の管理）を無事に乗り切ることを、実生1年目の目標にしましょう。

🦠 病害虫・トラブル

根ジラミ（根に付く介殻虫）

乾いた用土の中で根に寄生し、繁殖力が強いわりに発見しにくい害虫です。生育が鈍い、水を与えても張りが戻らないといった株は要注意です。見つけたら根を清潔な水でよく洗い流し、薬剤の希釈液に浸けてから新しい用土に植え替えます。秋の植替え時に、予防的に薬剤を灌水処理しておくのも有効です。

カイガラムシ・アブラムシ

蕾や花のまわりに発生することがあります。見つけ次第、歯ブラシなどでこすり落とすか、薬剤の希釈液で対処しましょう。

ナメクジ・夜行性の幼虫

ナメクジは花弁を、ヨトウムシやハマキガの幼虫は葉を食害します。いずれも夜間に活動するため、夜に見回って捕殺するのが基本の対策です。

根腐れ・蒸れ

過湿・水はけの悪い用土・風通しの悪い環境が主な原因で、数日でボディが溶けるように傷んでしまうことがある、もっとも警戒すべきトラブルです。とくに日本の梅雨〜盛夏は高温多湿になるため、雨よけと送風による通気の確保を徹底しましょう。傷んだ場合は株を抜いて傷んだ根を取り除き、乾かしてから新しい用土に植え直します。

日焼け

とくに初夏の急な直射日光で発生しやすいトラブルです。50%程度の遮光ネットを使い、光に当てる量は少しずつ増やして株を慣らしていきましょう。

表皮の破れ

水を与えすぎるとボディが急激に膨張し、表皮が裂けて傷跡が残ることがあります。とくに乾燥に弱い小型種で起こりやすいため、「たっぷり」の量は控えめから様子を見て調整してください。

> コノフィツム栽培でつまずくポイントの多くは「水のやりすぎ」と「夏の通気不足」に集約されます。乾かし気味・風通しよく、を意識するだけで、失敗はぐっと減らせます。

🖊️ 栽培メモ

コノフィツムの種子を探す

QRを読み取る／seedstock.jp